

勅撰集及び新葉集釈教部における真言密教関連詠の一覧

但馬貴則

はじめに

本稿は平成二十六年十二月六日に相愛大学にて開催せられた和歌文学会関西例会における口頭発表「真言密教と釈教歌——勅撰集釈教部の用例の検討から——」で配布した用例集に加筆修正を施したものである。後拾遺集に始まる勅撰和歌集釈教部に収められている歌の題材としては、法華三部経や浄土教など、天台教学に由来するものがよく知られているが、一方で、平安仏教のもう一つの柱である真言密教（東密）を題材とした歌ほどの程度存在するのか、また、その歌の内容はいかなるものであるのかというのが、発表を行った直接の動機となる。本稿では、真言密教系釈教歌の分類基準として「教義」「修法」「高野山、弘法大師信仰」「東密関係者」というものを私に用いた上で一覧を作成した。また、口頭発表の際には根拠説明は簡略なものに留めたが、本稿ではすべての用例について真言密教との関わりを明示することにした。

（凡例）

- 1、勅撰集（後拾遺集から新続古今集まで）及び新葉集の本文については、新編国歌大観第一巻所収のものを使用した。
- 2、用例収集に際しては、以下のごとき分類基準を私に用いた。
 - a：教義関連（教相、すなわち経典や教理の他、真言密教そのものを詠んだものなど）
 - b：修法関連（事相、すなわち具体的な修法や月輪観などの観法、また伝授など）
 - c：高野山、大師信仰関連
 - d：その他（おもに東密関係者の詠んだ歌を採り上げた）
- ↓寂蓮や西行、真観などといった、法流が明確でない歌人については東密との関わりが明確である歌のみを対象とした。
- 3、密教には東密（真言密教）以外に台密（山門、寺門）も

存在するが、本稿では東密からの影響がはっきりと認められる台密詠も一覽に含めた。

4、おもな参考文献は以下の通りである（順不同）。

- ① 密教大辞典（縮刷版 法蔵館）
 - ② 密教辞典（法蔵館）
 - ③ 和歌大辞典（明治書院）
 - ④ 勅撰集作者部類（國學院編 近代デジタルライブラリーより）
 - ⑤ 昭和新纂 国訳大蔵經 宗典部第二卷『真言宗聖典』（大法輪閣）
↓引用に際しては所収資料ごとに附せられている頁番号を用いた。
 - ⑥ 新国訳大蔵經 密教部1『大日經』（大蔵出版）
↓頁番号については⑤と同様。
 - ⑦ 講談社学術文庫『密教経典』（宮坂宥勝訳注）
 - ⑧ 釈教歌の研究（石原清志著 同朋舎出版）
 - ⑨ 山田昭全著作集 第三卷『釈教歌の展開』（おうふう）
 - ⑩ 同 第四卷『西行の和歌と仏教』
⑪ 密教・自心の探求 — 『菩提心論』を読む（生井智紹著 大法輪閣）
 - ⑫ 真言密教 阿字観瞑想入門（山崎泰廣著 春秋社）
 - ⑬ 密教概論（高神覚昇著 大法輪閣）
- 5、歌及び詞書に明確な根拠がある場合はその箇所を太字で

示し、それ以外については著名歌人の場合を除いて、*を附した上で根拠を記した。

6、資料からの引用に際し、異体字や省文については通行のものに改めた。

用例一覽

a、教義関連の例

詞花 四一二

即身成仏といふことをよめる

読人不知

露のみのきえてほとけになることはつとめてのちぞしるべかりける

*術語「即身成仏」は『菩提心論』を典拠として弘法大師が用いたものである（① 一四〇三頁の「即身成仏」の項を参照）。

続古今 七六〇

大日經の十縁生句を歌によみ侍りけるに、水月を

光俊朝臣

うきかげはやどりもはてじあしがものさわぐいりえの秋のよのつき

*安井久善『藤原光俊の研究』によると、真観は出家の際に一時高野山に住した可能性があり、かつ葉室家の菩提寺たる「葉室山浄住寺」は、はじめ山門（円仁）系であったものの、真観の時代には真言律宗（叡尊）系となつて

いたということである(六二〜六五、七一〜七二頁)。ただし真観の法流については明確ではない。

新後撰 六四〇

大日経を 前中納言為方(出家後の法流不明)

しなじなにかはるころの色もみなはてはひとつのちかひなりけり

六四二

父母所生身即証大覚位のころを

法印覚源(東寺長者)

たれゆゑにこのたびかかる身をうけて又ありがたき法にあふらん

*作者については①の「覚源」の項(二二七頁)を参照。

詞書は『菩提心論』末尾の菩提心への讚に拠る(⑤ 九

頁及び⑪ 一八〇頁を参照)。

六四四

密厳世界

前大僧正隆弁(台密)

まよひしも一國ぞとささるなるまことのみちのおくぞ床しき

*作者については③の一〇五九頁を参照。術語「密厳世界」

は空海請来の『大乘密厳経』(① 二二〇七頁の「密厳

仏国」の項を参照)に見える。

続千載 九二七(後宇多院御製)

十住心論の開内庫授宝

ける

*詞書の「開内庫授宝」に該当する記述が、『秘密曼荼羅十住心論』の略本たる『秘蔵宝鑰』に二箇所存在する

(⑤ 二、四頁を参照)。

九三二

然此自証三菩提過一切心地を

前大僧正公澄(台密)

みか月の雲井にたかく出でぬれば霞も霧もたちぞへだてぬ

*作者については③の「公澄」の項(三〇六頁)を参照。

詞書が東密の用いる二十卷本『大日経疏』卷一冒頭の住

心品への解説と同じであることから採り上げた(⑤ 二頁及び⑦ 一八二〜一八五頁)が、台密の用いる『大日

経義釈』と同一本文の可能性も考えられる。

九三九

有空不二の心を

法印道我(東寺二の長者)

むなしともありともいはじいまさらに誠の法のふたつなければ

*作者については①の「道我」の項(二三四五頁)を参照。詞書の「有空不二」は『大日経疏』卷二に見える

(⑤ 一〇四頁)。

九八八

真言の教相尋ねききて後、こと葉は聞きしにかはらで、

心いとふかきよし申して侍りける人の返事に

前大僧正道宝(東寺長者)

ふかしともおもひなはてそ法の水そのみなもとほくみもつ
くさじ

*作者については①の「道宝」の項(一六六七頁)を参照。

一〇一〇(一〇〇九番以降三首「釈教の心を」とあり)

前大僧正禅助

さとるべき道も心のうちなればよそになしてはいかがまよ
はん

*上の句が『般若心経秘鍵』冒頭部分を踏まえたものとなっ
ている(⑤ 一頁を参照)。

風雅 二〇七一

釈教御歌の中に

後宇多院御歌

そのままにたえまをしるはまことある三国つたはることば
なりけり

*『中世の文学 風雅和歌集』(三弥井書店)の頭註では二
句について「だるま」かとする(三八八頁)が、その場
合、初句と二句は「即身成仏」を、三句以降は「真言密教」
を指すことになると考えられる。

新千載 八二九

菩提心即是白淨信心義也

権僧正道我

三芳野の雲を花ぞと聞きしより外にうつらぬわが心かな

*詞書は『大日経疏』巻第一に見える(⑤ 三三三頁を参照)。

また「白淨信心」は①の一八八頁にも説明を見ることが
できる。

八三六

千首歌よませ給うけるに、鏡像を

後宇多院御製

ます鏡うつれる影をそのままにありとみるこそまことなり
一けれ

*『即身成仏義』の「六大(識大)」を詠んだものと解し

た(① 二三二一〜二三三三頁の「六大体大」の項及び

⑤ 二〜六、⑬ 六六〜八五頁を参照)。

八六三

千首歌よませ給うけるに

後宇多院御製

水の面にうつれる月の光こそみるには見えてとればとられぬ

*『大日経』「住心品」の「水月喩」か(⑥ 一三頁及び

⑦ 九八〜一〇〇頁を参照)。

新拾遺 一五〇四

十住心の中に、覚心不生心のころを 法印守遍(台密)

跡もなき室のやしまの夕煙なびくとみしやまよひなるらん

*作者については③の四七六頁を参照。台密による『十住
心論』の享受は安然などに見ることができる(① 五一
〜五二頁の「安然」の項などを参照)。

新葉 六二二

千首歌よませ給ける時、大日を

御製(長慶帝)

六のちりあまねくてらす光こそ三世につねなるさとりなり

けれ

*長慶帝については、③の「長慶天皇」の項(六七八頁)に「嗟

峨大覚寺において崩御」とある他、高野山に「長慶院御願文」が残されてもいる（『靈宝館だより』一一二号 一〇頁を参照）。

b、修法関連

後拾遺 一一八八

月輪観をよめる

僧都覚超（台密）

月のわに心をかけしゆふべよりよろづのことをゆめとみるかな

*月輪観について詳述している『菩提心論』が特に東密において重用せられていること（① 二〇五二頁の「菩提心論」の項及び⑩ 六四〇六六頁など）の他、覚鑑以前の月輪観関連の著書の多くが東密系であること（⑫ 七三頁）などから、（阿字観も含めて）台密関係者の例も一覧に含めた。作者は台密のうち、川流の祖となる（① 二二三頁の「覚超」の項を参照）。

金葉 六四二

常住心月輪といへる心をよめる

澄成法師（醍醐寺）

よとともにごころのうちにするむ月をありとしるこそはるるなりけれ

*作者については新大系本金葉集の「人名索引」二六頁を参照。

千載 一二一八（前参議教長）

即身成仏の心を

てる月の心の水にすみぬればやがてこの身にひかりをぞさす
*『即身成仏義』「三密加持速疾顕」に「心水」が見える
（⑤ 九頁を参照）ことから、月輪観を用いた修法関連の歌と解した。なお③の「教長」の項（八〇二頁）に拠れば、作者は出家後高野山へ入ったとのことであり、その時期は覚鑑の入定からほぼ二十年後となる。

一二二三

百首歌よませ侍りける時、法文のうたに、五智如来をよみ侍りけるに、平等性智のころをよみ侍りける

撰政右大臣

人ごとにかはるはゆめのまどひにてさむればをなじころなりけり

*次の歌も含めて九条兼実の「五智詠」となる。「五智」は密教行者が修行することで得られる智体（① 六二〇頁を参照）であるが、本発表では『菩提心論』「三摩地」や『即身成仏義』「三密加持速疾顕」などの記述とのつながりから、修法に関するものとして扱うこととした。なお兼実自身は法然に帰依しており、その信仰はむしろ「天台浄土教」と呼ぶべきではあるが、高野山熊谷寺に「法然と親鸞とを伴って高野山を訪れた」という記録が残されていることから「大師信仰」を有していた可能性もあり、かつは当時の高野山と浄土教との関わり

(②) 一九一〇―一九七の「高野山」の項を参照) も考慮して一覽に含めることとした。ただし、当時流行していた「法数歌」(『岩波仏教辞典』一〇七九頁「和歌と仏教」の項を参照) とみなすこともできなくはない。

新古今 一九四七

家に百首歌よみ侍ける時、五智の心を、妙觀察智

入道前関白太政大臣

そこきよく心の水をすまさずはいかがさどりの蓮をもみん

*九条兼実の「五智詠」である。「心の水」に『即身成仏義』『心水』(前掲)とのつながりを、「さどりの蓮」に『菩提心論』

における「妙觀察智」の別名「蓮華智」(⑤) 六頁を参照) との類似性を認め得る。

一九七八(卷末詠)

観心をよみ侍りける

西行法師

やみはれて心のそらにすむ月はにしの山辺やちかく成るらむ

*①の「観心」の項(四〇四頁)に「観心明瞭ならざれば即身成仏することを得ず」とあることから、配列上解せられる「死後の西方極楽浄土への往生」ではなく、月輪観などによる悟り(＝即身成仏)を詠んだものと解した。

新勅撰 五九八

家に百首歌よませ侍りける時、五智の大円鏡智のころを

後法性寺入道前関白太政大臣

くもりなくみがきあらはすさとりこそまとかにすめるかのみなりけれ

*九条兼実の「五智詠」である。

六一〇

如来無辺誓願仕の心をよめる

鏝也法師(高野山)

かずしらぬちぢのはちすにすむ月を心のみづにうつしてぞ見る

*詞書は真言行者の通願たる「五大願」の第四で(①) 六一五頁の「五大願」の項を参照)、法会の際に唱える。作者については③の「鏝也」の項(八二六頁)を参照。

六二四

なき人の手にものかきてと申しける人に、光明真言をかきておくり侍るとて

高弁上人

かきつくるあとにひかりのかかやけばくらきみちにもやみははるらむ

*高弁(明恵)は華嚴僧であるが、小野系の勸修寺流を受法して梅尾流の祖となっており(①) 五二九―五三〇頁の「高弁」の項を参照)、著書に『光明真言土砂勸信記』(⑤所収)もある。

続古今 七五九(前歌より「だいしらず」とあり)

隆専法師(法流不明)

さとりゆくころのうちにすむつきはいでているべきやまのはもなし

*上の句から月輪觀乃至『菩提心論』「三摩地」を詠んだものと解した(⑤) 五〇七頁を参照)。

七六二

月の夜坐禪の次に 太上天皇(後嵯峨院 大覚寺門跡)
なにかはつきやあらぬとたどるべきわがもとのみをおも
ひしりなば

*月輪觀と解した。院と大覚寺とのつながりについては②の「寺院・歴代一覧」一四三頁を参照。

続拾遺 一三七一、一三七二

心月輪のころをよみて心海上人につかはしける

按察使隆衡

むねのうちのくもらぬ月にうつしてぞふかきみのりを心と
はしる

返し

心海上人(律僧 泉涌寺)

むねの中にすむ月かげのほかに又ふかき御法のころろやは
ある

*心海については①の一二四五頁を参照。当時の泉涌寺は
台密禪淨の四宗兼学(①) 一三六九頁の「泉涌寺」の項
を参照)。

一三七六

本源清淨大円鏡の心を

法印覺源(東寺長者)

くもりなく心のそこもうつるらんもとよりきよき法のかが
みは

*五智の「大円境智」と解した(⑤)の『菩提心論』六頁な
ど)。作者については①の二二七頁を参照。

一三七七

妙觀察智

法印良覺(高野山檢校)

晴れくもる人の心のうちまでも空にてらしてすめる月かな
*「妙觀察智」は「五智」のうち西方阿弥陀如来の智を指す。

作者については①の「良覺」の項(二二七六頁)から、『徒
然草』に「堀池の僧止」(③) 一〇五九頁の「良覺」など
とせられる人物とは別人と解した。

一三七八

法印最信(台密)

おもひわくむつの心をはなれてはまことをさとる道やなか
らん

*前歌からの配列の他、「妙觀察智」が五智「九識」の「第
六意識」に対応すること(⑬) 七七、八四頁を参照)から、
「むつの心」を「妙觀察智」とみなした。また作者につ
いては④の一八四頁に「叡山勝長寿院別当法師」とある
ことに拠った。

新後撰 六四六

一流のことをおもひてよみ侍りける

権少僧都道順(東寺長者)

夏草の事しげき世にまよひても猶末たのむをのふる道
*作者については①の「道順」の項(一六五八頁)を参照

(醍醐寺の報恩院流)。

六四七

百首歌めされし次に、釈教

太上天皇

まとかなるはつきの月の大空にひかりとなれる四方の秋ぎり

*後宇多院は本集奏覧の四年後に出家。五智の「大円鏡智」

乃至月輪観と解した。

六五三、六五四

心月輪の心を

小侍従

いさぎよく月は心にすむものとするこそやみのはるるなり
けれ

前大僧正行尊(台密)

くらし夜のまよひの雲のはれぬればしづかにすめる月をみ
るかな

*行尊は三井寺の長吏であるが、高野山で覚鑊の大伝法院

造立を助けており(① 三〇一頁)、覚鑊には『一期大

要秘密集』(⑤所収)のごとき、月輪観、阿字観につい

て述べた著書が存在する。

六八九

衆生無辺誓願度

参議雅経(在家 東台の別不明)

行へなき身をうぢ河のはしはしらたててしものを人わたせ
とは

*詞書は「五大願」の第一(① 六一五頁の「五大願」の
項を参照)。

続千載 九二五(巻頭)

菩提心論、日日漸加至十五日円満無碍の心をよませ給う
ける 法皇御製

日にそへて影はかはれど大空の月はひとつぞすみまさりけ
る

*「三摩地」(⑤ 五―七頁を参照)を詠んだもので、
九二六番歌も含めて、『菩提心論』で「不読」とせられ

る―行者以外は知り得ない―くだりを題材としている。

九二六

三摩地現前

月のためなにをいとはん雲霧もさはらぬ影はいつもさやけし

九三二

妙觀察心の心を

法印守禅(法流不明)

霧晴れてくもらぬにし山のはかかるもきよき月の影かな

*九二五の詞書に用いられている『菩提心論』の「三摩地」
に、「五智」と月輪観とを結びつけたくだりを見ることが
ができる(⑤ 六頁を参照)。

九三五、九三六

鳥羽院御時、御なで物の鏡を給ひて奏し侍りける

覚鑊上人

ますかがみうつしおこするすがたをばまことに三世の仏と
ぞみる

御返し

鳥羽院御製

おしなべて誰も仏になりぬとは鏡の影にけふこそはみれ

*①の「御撫物」の項(一八六頁)に、「…祈祷の時、単衣・小袖・人形・髻等を加持して、身を撫づるに擬するなり」とあることに拠ったが、九三五は「六大体大」の「識大」を詠んだ可能性も考えられる(⑬ 六六〜八五頁を参照)。

九九二

題しらず

前大僧正禪助

おもはずよかしこき代代の法の道おろかなる身につたふべしとは

*九九三番歌も含めて事相伝授。後宇多院への広沢流の伝授を指すと考えられる(① 一三五九頁の「禪助」の項を参照)。

九九三

百首歌めされし次に

法皇御製

たづね入るうだの風のうけてこそ法をつたへし宿はしめけれ

*宇多法皇が益信から法流を伝受して広沢流が起こった旨を踏まえると考えられる(① 二二七八〜二二七九頁の

「益信」の項を参照)。

九九六

釈教歌に

法務公紹(東寺長者)

まよひこしやみのうつつをなげきても心の月をたのむばかりぞ

*「心月輪」と解した。作者については①の「公紹」の項(五一一〜五二二頁)を参照。

一〇〇四

百首歌めされし次に

法皇御製

久方の空に月日のめぐるこそまどひをてらすはじめなりけれ

*『菩提心論』『三摩地』に「日月輪」に関する記述があること(⑤ 五頁)から、同集の九二五、九二六と同様の

例とみなした。

続後拾遺 一二九六

阿字観を

前僧正公朝(台密)

夢の中になにはの事をみつれどもさむれば蘆の一夜なりけり

*作者については③の「公朝」の項(三〇六頁)を参照。

一三一一

千首歌よませ給うけるに

後宇多院御製

心にてやがて心をつたふるぞ三世にはらぬまことなりける

*事相伝授(以下三首も同様)。「まこと」は「真言密教」を指すか。

一三一二

題不知

僧正道意(東寺長者)

法の道かかれとてこそ伝へしかいのるかひある御代の行末

*作者について①の「道意」の項（一六四八頁）に「後宇多法皇を拜して伝法職位を承く」とあることから、一三一一番歌との内容的な連続性を認め得る。

風雅 二〇七二

百首歌たてまつりしに、雑歌

入道二品親王法守（仁和寺）

わがうくる御法はつねのことはのおよばぬうへにとけるなるべし

*作者は禅助から伝法灌頂を承けている（① 二〇一〇～二〇一一頁の「法守」の項を参照）。

二〇八〇

釈教のこころをよませ給ひける

後宇多院御歌

心ざしふかくくみてしひろ沢のながれはすゑもたえじとぞ思ふ

*後宇多院は禅助から広沢流、醍醐寺の憲淳から小野流の伝法灌頂を承けているが、院を流祖とする大覚寺御流は広沢流の系列に位置付けられる（① 五二二～五二三頁の「後宇多法皇」の項及び一四四〇頁の「大覚寺御流」の項を参照）。

二〇九〇

観勝寺にて理趣三昧おこなひける道場に、花こより紅葉のちりたりければよみ侍りける

従二位為子

法の庭にちらすもみじは山姫のそむるもふかきえとやなる

らむ

*法会関連。観勝寺はもと寺門系であるが、文永五年にこれを復旧した大円（良胤）が東密（小野系の三宝院、金剛王院流）であることから一覽に含めた（① 四〇三の「観勝寺」の項及び、② 七一〇頁の「良胤」の項を参照）。

新千載 八三五

大円鏡智の心を

前大僧正良覚（台密）

くもらずよ花のかけみるます鏡心の水の波もたたねば

*作者については③の「良覚」の項（一〇五九頁）を参照（続拾遺一三七七の良覚は「検校」）。

八三九、八四〇

後二条院かくれさせ給うての比かの水精の御鏡をつかはされて侍りけるを、七日光明真言法を行ひてかへしわたしたてまつるとて

前大僧正禅助

よのつねの光ならねばますますかみ底まですめるさとりをしる

御返し

西花門院

過ぎきつる名残はいとどますかがみありとしもなき夢の面かげ

*「光明真言法」については新勅撰六二四を、「御鏡」については続千載九三五、九三六を参照。八三九は「大円鏡智」との関わりも考えられる。

八七四

松風を宴坐の友とし郎月を誦習の友として読み侍りける
高弁上人

心月のすむに無明の雲はれて解脱の門に松風ぞ吹く

*上の句から月輪観と解した。

新拾遺 一五〇五

法流のこと勅問につきて奏し侍りし時、思ひつづけ侍りける
前僧正栄海（勸修寺）

ことのはをちらさずもがな雲るまで吹きつたへたる小野の

山風

*作者については①の「栄海」の項（二二二三～二二二四頁）を参照。

一五〇六

法界体性智のころを 後法性寺入道前関白太政大臣

おのづから法のさかひにいる人はそれこそやがてさとりなりけり

*九条兼実の「五智詠」である。なお「法界体性智」は顕

教の「四智」と異なり、密教でのみ談ぜられる大日如来の智である（① 六二〇～六二二頁の「五智」の項を参

照）。

一五二〇

心月輪の心を

前大僧正良覚（台密）

身をさらぬ心の月のわくらばにすむぞ悟のはじめなりける

*作者については新千載八三五を参照。月輪観と解し得る。

一五二一

菩提心論の我見自心形如月輪を

惟賢上人（台密）

よそにみる影とはいはじ心にも空にもおなじ月ぞいでぬる

*作者については④の二二二頁を参照。台密による『菩提

心論』享受はaの新拾遺一五〇四を参照。

一五二二

前大僧正成恵に法流のこと申しおくとてよみ侍りける

権僧正寛伊

憑むぞよ御法の駒をすすめても跡にまよふなをのふる道

*②の「密教系譜」（一三〇頁 B 一八三、一八四）を確認すると、作者が小野系の安祥寺流の系譜に属しており、

かつは「成慧」に法流を伝えていることが知られる。

新統古今 八六二

元亨二年四月亀山殿にて、人人題をさぐりて五十首歌つ

かうまつりけるに、釈教

権僧正道我

ひろ沢の代代のながれをいかにしてせばき袖にもうけ始めけん

*次の歌も含めて事相伝授を詠んだ歌となる。なお①の「道

我」の項（二三四五頁）に拠ると、作者は小野系の勸修

寺流と随心院流を学んだ他、広沢流についても受法した

とのことであり、また、「後宇多法皇の勅願にて大覚寺内に聖無動院を創靱し、東山清閑寺を再興す」とも記されて

れている。

八六三

伝法灌頂の後法流の行末などおもひつづけて、人のもと

へ申しつかはしける 権僧正通助(法流不明)

かかくべき末の光を思ふぞよつたへし後の法のともし火

*八六二番歌との内容的な連続性から一覽に含めることとした。

c、高野山、大師信仰関連詠及び弘法大師詠

千載 一二三六

高野にまいりてよみ侍ける

寂蓮法師

暁をたかのの山にまつほどやこけのしたにもあり明の月

*弘法大師との「龍華三会」① 一二四一頁を参照を願った歌となる。

新勅撰 五七四(巻頭)

土佐国室戸といふところにて

弘法大師

法性のむろといへどわがすめばうゐの浪風よせぬ日ぞなき

*①の「最御崎寺」の項(二〇五九頁)に「大師未だ近土たりし時求聞持法を練行して悉地を得給ひし所なり」と説明せられている。なお東密における「法性」「有為うゐ」は、顕教や台密などとは異なる意味合いで用いられている(① 二〇一四頁の「法性」及び一二三頁の「有為無為」の項を参照)。

続後撰 六〇七

弘法大師の法験事、国史にみゆることあらば、しるして

と申しける人に 中原師光

あしはらのしげきことのはかきわけてのりのみちをもけふ見つるかな

*大師信仰と解した。

続古今 七八五

三会暁をおもひてよみ侍りける

法印良覚(高野山法印)

かくしつつながきねぶりのさめやせんまつあかつきははるかなれども

*作者についてはbの続拾遺一三七七を参照。

七九六

高野にまうでて侍りける時、おくの院にて

入道前太政大臣(西園寺公経)

よをすててすまれぬ身こそかなしけれかかるみやまのあとを見ながら

*高野山奥の院には大師御廟があることから、高野山、大師信仰の典型例とみなし得る。

続千載 九二八

真如法親王おとづれて侍りける返事に

弘法大師

かくばかり達磨をしれる君なれば陀多謁多までぞいたるなりけりマ

*四句「陀多謁多」は吉田兼右筆本(笠間書院の影印 二四三

頁)、佛敎大学図書館蔵本(和泉書院の影印 一七二頁)

ともこの表記であるが、「謁」を「掲」の誤写と見るならば、

『大日経疏』卷一に見える「怛他掲多」(梵語「タターガタ」)

と解することもでき、その場合は「如来」を意味するこ

とになる(⑤ 二四及び⑦ 二二二～二二三頁を参照)。

すなわち「悟りを得たことで如来の境地まで達した」と

いうことである。

一〇一五(一〇一三以降三首「題しらず」)

僧正覚円

きえぬべき法のともし火みる度にかかぐる人のなきぞかな

しき

*作者(法性)は①の「法性」の項に拠ると「高野山八傑

の一」で、大伝法院方と金剛峯寺方との争いに関わった

ために出雲に配流せられたということであり(二〇一四

頁)、そこから「高野山の法灯の絶え入りそうな現状を

嘆いた歌」と解し得る。

一〇一六

弘安元年百首歌奉りける時

入道二品親王性助(仁和寺)

きえぬべき法のともし火かかげてもたかのの山のおくるを

ぞまつ

*作者については①の「性助」の項(一一六一頁)を参照。

一〇一五番歌と直接のつながりはないが、配列から「今にも消えそうな高野山の法灯を掲げ、大師との龍華三会を待つ」という連続性を認め得る。

一〇一七

正和二年、法皇高野山に御幸侍りし時、代代の跡にこえ

て山のほど御輿にもめされざりければ、おもひつづけ侍

りける

たかの山御ゆきの跡はおほけれどまことの道はいまぞみえ

ける

*作者についてはbの新後撰六四六を、後宇多院の高野山

登山については①の「後宇多法皇」及び「高野山」の項

(五二二～五二三、五四八頁)を参照。配列から「院によ

る高野山の法灯の護持を讃えた歌」と解し得る。

新千載 九三六、九三七

題しらず

かかげおく法の灯きえぬまに眺ちかくなるがうれしさ

中務卿宗尊親王

鐘のおとはあけぬときけど高野山猶はるかなる眺の空

*「龍華三会」を願う歌となる(以下三首も同様)。寛尊

については③の二〇七頁の他、②の「寺院・歴代一覽」

一四三頁に大覚寺二十五世としてその名を見ることがで

きる。

新統古今 八三五

さぬきの普通寺にてよみ侍りける

僧正宋縁（法流不明 新熊野別当）

たかの山そのあかつきを契りきてここにもおなじ月やすむらん

*①の「普通寺」の項（一三六三頁）に「弘法大師御誕生所」とある。作者については③の「宋縁」の項（五七六頁）を参照。

八七六

高野にすみける比おくの院にまうでて、夜もすがら念誦などしておもひつづけける 元可法師（法流不明）

高野山うき世の夢もさめぬべしその暁をまつ嵐に

*作者については③の「元可」の項（二八二頁）を参照。

新葉 六一九

題しらず 二品法親王深勝（法流不明）

高野山あか月とほく松の戸にひかりをのこす法の灯

*作者については③の「深勝」の項（五二八頁）を参照。

d、その他（おもに東密関係者の歌）

金葉 六四三

醍醐の桜会に花のちるを見てよめる 珍海法師母

けふもなほをしみやせましのりのためちらすはなぞとおもひなさずは

*作者の子の珍海は東大寺学僧（華嚴宗）で、醍醐三宝院

定海及び勸修寺寛信から受法（① 一六一五頁の「珍海」

の項を参照）している。ただし法流に名前は見えない。

千載 一二二〇～一二二一

冬のころ、後入道法親王高野にこもりて侍けるに、おくりたまうける 崇徳院御製

ふる雪はたにのとほそをうづむともみよのほとけのひやてらすらん

御返事

仁和寺後入道法親王覚性

てらすなるみよの仏のあさひにはふる雪よりもつみやきゆるらん

*覚性法親王は仁和寺五世で日本総法務初代（① 二一八九～二一九頁の「覚性」の項を参照）。

一二三二

寿量品のところをよめる

円位法師

わしの山月をいりぬとみる人はくらきにまよふ心なりけり

*山田昭全「西行の和歌と仏教」（⑩ 六三～七五頁）から、月輪観の比喩を用いた一品経歌と解した。

新古今 一九二三

みたけの笙のいはやにこもりてよめる 日藏上人

寂寞のこけのいはとのしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき
*作者は修験僧で東寺にて密教を学ぶ。天慶四年の断食修行を踏まえるか（② 五四一頁の「日藏」の項を参照）。

新勅撰 六二五（高弁上人）

なにごとかと申したりける人の返ごとにつかはしける
きよたきやせぜのいは波たかを山人もあらしの風ぞ身にし
む

*「たかを山」は神護寺を指すか。

続後撰 六二二（六一九以降「題しらず」）

法務寛信

入りぬともおもはざらなん月かげのわしのたかねにとほ
くてらせば

*作者については①の「寛信」の項（四〇四頁）から、
小野系の勧修寺流の祖と知られる。歌の趣向は千載
一二三一に近く、月輪観と法華経との双方に関わるもの
となっている（寛信は西行より約三十年長）。

続拾遺 一三七四

仏真法身猶如虚空応物現形如水中月といへる心を

大僧正道室（東寺長者）

水のおもに光をわけてやどるなりおなじみ空の秋のよの月
*作者については①の一六六七頁を参照。詞書は『金剛明
経』に拠る（大正新脩大藏経テキストデータベースを参
照）が、内容的には『大日経』住心品の「水月喩」に通
ずるところもある（① 八五二―八五三頁の「十縁生句」
の項を参照）。

新後撰 六九一

大日経三三昧那品、現般涅槃成就衆生

了然上人

まよはじな入りぬと見ゆる月も猶おなじ空ゆくかげとしり
なば

*事相詠。作者の法流は不明。後宇多院下命の撰集である
ことから一覽のdに入れた。

玉葉 二七〇三（前歌より「釈教の心を」）

入道二品親王覚性

たかせ舟くるしき海のくらしきにものりしる人はまどはざり
けり

*作者については千載一二二一を参照。

二七二七

紀伊国よりのぼるとて西寺の塔のきりにまぎれて見えた
るに、仏塔高踞のかたちは衆生恋慕のおもひをすすめん
がためなりといふことおもひいでられて渴仰のあまり馬
よりおりて瑠璃頗梨の池にひたひをつくるこちしてな
くなく礼拝するに、天竺に釈迦大師因位の時、燃灯仏に
あひたてまつりて泥にかみをしきてふませたてまつり給
ひしあといまにとどまりて我等が福田なることおもひい
でられて、読み侍りける 高弁上人
をがみつるしるしやここにとどまらむかみをしきてし跡も
きえねば

*東密の「西寺」については①の「西寺」の項（七五〇頁）
を参照。

二七二二

般若心経の畢竟空の心を

前大納言為兼

むなしきをきはめをはりてそのうへによをつねなりとまた
みつるかな

*岩佐美代子氏が『般若心経秘鍵』との関わりを指摘して
いることに拠る(『京極派和歌の研究』六四～七〇頁)。

二七二六

夜法文を清談するに、時うつりゆきて後夜のかねをさき
てよめる

高弁上人

のりのこゑにさきぞわかれぬながき夜のねぶりをさますあ
かつきのかね

*三句以降は「龍華三会」の可能性も考えられる。

続千載 九三四

大日経成就悉地品、無垢妙清浄円鏡常現前 了然上人

くもりなくいにしへいまをへだてぬはこころにみがくかが
みなりけり

*新後撰六九一と同様の理由で一覽に含めることとした。

九三七、九三八

真言院の花を御覧じて 法皇御製(後宇多院)

みつの世につねにすむべきことわりはちらぬさくらの色ぞ
みせける

御返し

前大僧正禪助

みつのようにちるもちらぬも九重のはなの色をば君ぞみるべき
*①の「真言院」の項(一二六三頁)には「宮中後七日御

修法奉修の道場」とある。

九四五

信解品、譬如童子幼稚無識の心を 法印定為(醍醐寺)

しらでこそむすびおきけめあげまきのいとけなかりしほど
の契を

*作者については③の「定為」の項(四八二頁)を、東密

における法華経重視に関しては②の「妙法蓮華経」の項
(六六一～六六二頁)を参照。

九七二

性助法親王かくれて侍りける比、法眼行濟法花経をかき
て供養せさせ侍りけるに 前大僧正禪助

さこそげにうつすひかりもてらすらめ御法のはなのさと
ひらけて

*性助法親王は弘安五年(一二八二)十二月十九日寂(①

一一六一頁の「性助」の項を参照)。

九八六

法印聖覚説法し侍りけるに、銀にて蓮の葉をつくりて水
精念珠をおきてつかはしける 前権僧正成賢

極楽のはちすのうへにおく露をわが身の玉とおもはましか
ば

*聖覚は浄土系の天台僧(『岩波仏教辞典』五九六頁)。成
賢は醍醐寺座主で、①の「成賢」の項(一三三〇頁)に

は作者が浄土信仰に傾倒していた旨も記されている。

円宗寺法華会おしおこなはれけるにまゐりて、雪のいたくふり侍りければ
権律師定海

おもひきや庭の白雪ふみ分けてたえにし道の跡つげんとは

*作者は四十代東寺長者で、小野系の三宝院流の祖(①)

一一一八頁の「定海」の項を参照。

二〇一八、二〇一九

いかなるをりにか申しつかはしける
覚鏝上人母

そこきよき心の水のすみければながるすゑもにしへこそ

ゆけ

返し
覚鏝上人

のりつめる人をしわたす舟なればにしのがれにさをやさ

すらん

*覚鏝には密教と浄土教とを融合した「秘密念仏」がある

(②) 五八三頁の「秘密念仏」の項を参照。

二〇二七

高野の庵室のまへに、藤の花のさきたるをみて

二品法親王覚法

藤の花わがまつ雲の色なれば心にかけてけふもながめつ

*作者は仁和寺四代門跡で仁和御流の祖でもあり、大知四

年には高野山に上つてもいる(①) 一二七頁の「覚法」

の項を参照。「高野」を高野山と解するのであれば、「高

野山に紫雲(＝聖衆来迎)」を見たということになり、

当時の「高野浄土」思想を反映した歌とみなすこともできる(②) 一九一―一九七頁の「高野山」の項を参照。

一〇二八、一〇二九

覚性法親王、観音を紫雲にのせたてまつりて、その心を

歌によむべきよし申しつかはして侍りけるによみける

基俊

紫の雲のおりある山里にこころの月やへだてなからん

返し
入道二品親王覚性

へだてなき心の月は紫の雲とともにぞにしへ行きける

*覚性については千載一二二一を参照。西方浄土を詠んだ贈答となるが、「心月輪」を含むことから、覚性より

三十ほど年長の覚鏝の秘密念仏思想との関わりも考えら

れる(⑤)の『五輪九字明秘密釈』一頁などを参照。

続後拾遺 一二九三(前歌より「釈教歌とて」とあり)

法印道我

法印道我

尋ねきて花さくそのに入りしよりおなじにほひの春風ぞ吹く

*作者についてはaの続千載九三九を参照。

二二九七

不妄語戒を

権僧正聖尊(醍醐寺)

津の国のなにはの事も偽はのちの世かけてあしとこそきけ

一三〇四

*作者については①の「聖尊」の項(一一八〇頁)を参照。
金剛般若経、如来者無所從來亦無所去といへる心を

法印守禪（法流不明）

出づるとも入るともみえて足引の山のをのへにすめる月影

* 続千載九三二との関連から採り上げた。

風雅 二〇六八

未得真覺処夢中といふ事をよめる

寛胤法親王（勸修寺）

ながき夜のやみのうつつにまよふかな夢を夢ともしらぬころに

* 作者については①の「寛胤」の項（三七八―三七九頁）

を参照。詞書は『成唯識論』に見える（大正新脩大藏経テキストデータベースを参照）。

新千載 八二一

尺教の歌としてよめる 入道二品親王法守（仁和寺）

六の道三のさかひにまよひきてながきねぶりのさめぬかなしさ

* 作者についてはbの風雅二〇七二を参照。

八三三

尺尊一代の説教を阿難の結集したまへる事を思ひて

権少僧都寛耀

かれはてし鶴の林のかたみとや法のことのはひろひ置きけん

* 作者は神護寺僧か（④ 一七八頁を参照）。

八五三

如是体を

入道二品親王法守

ありなしの二の道にとどまらぬ法やまことのすがたなるらん

* 同集八二一を参照。

八五九

仁王経奉持品智恵如密雲遍満於法界の心を 法印定為

大空にさとの雲やみちぬらんよもに御法の雨ぞあまねき

* 作者については続千載九四五を参照。

八六七

法務寛信もとへ申しおくりける

藤原基俊

月影のかさなる山へ入りぬればいまはたとへしあふぎをぞ

思ふ

* 寛信については続後撰六二二を参照。

八八〇

元享三年八月十五夜月五十首歌めされける次に

後宇多院御製

たづぬべきかたこそなけれ胸の内の月の都にいつもすむ身

は

* 述懐と見てdに分類したが、「心月輪」との関わりも考えられる。

八八八

寄月尺教といへることを 入道二品親王性助（仁和寺）

にしへ行く月にちぎりをむすびても心にかかるむらさきの

雲

* 作者についてはcの続千載一〇一六を参照。西方浄土を

詠んだ歌とみなし得るが、「月」「心」もあることから、
月輪観と絡めた秘密念仏の可能性も考えられる。

八九二

てならしけるわらはの身まかりにける一廻に、阿弥陀経
諸上善人俱会一処の心をよみ侍りける 法印定為

ちかひおくおなじ蓮の台こそ残るうき身のたのみなりけれ

* 作者については続千載九四五を参照。

八九三

如来浄花衆生覚花化生のころを

法眼行濟

露の身のおき所とてたのむかなさとひらけし花の台を

* ③の「行濟」の項(二三〇～二三一頁)に「仁和寺法眼」
とあることに拠った。詞書は浄土系の『安養抄』に見え
る(大正新脩大藏経テキストデータベースを参照)。

新拾遺 一四八六

釈教の御歌の中に

後宇多院御製

梅の花みよの仏の為にとてをりつる袖ぞ人ながめそ

新後拾遺 一四八一

化城喩品の心を

前大僧正頼仲(法流不明)

うかれたる我が身よいかでふる郷に旅と思はで住みさだむ
べき

* ④の二〇九頁で作者を「若宮別当」としており、かつ
は「若宮」(＝鶴岡八幡宮)の別当職が東密であること
① 一九七二～一九七三頁の「別当」の項を参照)か

ら採り上げた。

新統古今 八三九

元亨三年七月亀山殿にて、人人題をさぐりて七百首歌つ
かうまつりけるに、不説四衆過罪戒の心を

権僧正道我

ことの葉をよそにもらすな吹く風は四方の梢を猶さそふとも

* 作者についてはaの続千載九三九を参照。

八四六

瑞雲院贈左大臣遠忌に、法花経の料紙のために品品の歌、
崇賢門院すすめさせ給うけるに、譬喩品のころを

入道一品親王永助(仁和寺)

とにかくに三の車のわかれてもひとつ道にやめぐりあふらむ
* 作者については①の「永助」の項(一三九頁)を参照。

八四九

三世の報を観ずるに、ただ一夜の夢のごとし、いよいよ
身のうへの浮生をかなしぶよし慶政上人のもとに申しつ
かはすとて

二品法親王道深(仁和寺)

うつつともいとどたのまじ年月の過ぎにしかたは夢となる
世に

* 作者については①の「道深」の項(二六六二頁)を参照。
また③の「慶政」の項(二七八頁)から慶政が寺門僧で
あると知られる。

八五一

上覚上人のもとより、みる事はみなつねならぬうき世かな夢かとみゆるほどのはかなさ、と申したりける返事に

高弁上人

ながき夜の夢をゆめぞとする君やさめてまよへる人をたすけん

*上覚(行慈)は高弁の叔父(③ 二七八、四八三頁の「慶政」「上覚」の項を参照)で、仁和御流を高弁に伝えている(②の「密教系譜」一三三頁 C—三二を参照)。

八五二

前中納言定嗣経文歌すすめ侍りけるに、金光明経懺悔品をよみてつかはしける

僧正実瑜(東寺長者)

夢のうちにてらす光のなかりせばうき世のやみのいつかはるべき

*作者については①の「実瑜」の項(一〇〇六頁)を参照。

八七二

題しらず

前大僧正杲守(石山寺座主)

さとりえぬ心のやみのうつつこそ夢にまされるまよひなりけれ

*作者については①の「杲守」の項(五一〇頁)を参照。

新葉 六一六

後村上院第三年の御仏事の次によみおかせ給ける短冊をつがれうらに宸筆にて御経かかせ給たりける供養の導師つかうまつるともおもひつづけける

前大僧正頼意

かきおきし昔の春のことの葉に御のりの花をけふはそへつつ

*②の「寺院・歴代一覽」一四〇頁から、作者が一三二代東寺長者であると知られる。

六二〇

前大僧正頼意

つたへこし法の灯かかけてやあきらけき世を猶いのらまし

*前歌を参照。